○池田元副大臣　明確に覚えていないけれども、保安検査官の勤務対応は十分ではなかった、改善しなくてはならなかったと思っています。それは、もう一度行ったときに勤務表をとって、これから注意しようと。報告がないからね。

そうしたら、即座にノーでしょう。ほかのことを考えるという。報告・連絡・相談と、報告がないからね。それは保安院の独特のあれですよ。先ほどの文書のあれとか、いろいろな点で。だから6項目の指示を出した。その中には入っていないけれども、同じような話だと思います。

○質問者　わかりました。

質問事項の中に入れさせていただいておりますが、相馬病院。先ほどいただいたペーパーによると、相馬病院だけではなくて14日の段階で相当残っていた。

○池田元副大臣　それはかなり終わったと思うのです。残っていたのはそこですね。それは1日前だから。

そこの文書にも書いてあるように、手分けして救出したわけでしょう。それはよかったと思います。

○質問者　先ほどいただいた。

○池田元副大臣　ここにほら、3時15分に検査チームが出発して、これが対応しているわけだ。最後にこれが残ってしまった。

○質問者　この3月14日3時15分検査チーム出発と、この検査チームというのは、これは済みません、何のことでしょう。

○池田元副大臣　だから、除染というか、その現地へ行って除染するチームだと思います。

○質問者　病院に行って、入院患者さんの。

○池田元副大臣　そう、検査。

○質問者　検査なのですね。

○池田元副大臣　そういう意味の検査。放射能検査というか。

○質問者　わかりました。

そうすると、3月14日の午前3時15分の段階で、ここの一覧表に書かれているような人数の方がまだいたということになるのでしょうか。

○池田元副大臣　いたということです。これから言うと、恐らく病院だから厚生省辺りか県のそういう担当部局がまだ残っているリストをつくったと思うのです。それでうちの方へ来たわけです。

それで結局、班が対応をして、こんな時間だけれどもやったわけです。そう理解していればいいです。

○質問者　双葉病院で患者さんが残っているというのを現地本部長が初めて認知したのはこのときですか。

双葉病院に患者が残っているという報告があったのは、この14日。

○池田元副大臣　個別、双葉病院ではないけれども、そういうものがあった。

○質問者　こういうものがあったのが大体 14 日と。
○池田元副大臣　うん。先ほど言ったように、それでもピックアップした救出活動がまだ済んでいないのが、最後に残ったのは双葉病院で、それは自衛隊の 12 旅団が把握をしていたと。
○質問者　例えば避難に関して住民がまだ残っている場合に、オフサイトセンター、現地対策本部がやるべき、やった役割というのは具体的にはどういうことなのですか。
○池田元副大臣　住民支援班が 20km 圏外へ誘導する、搬出というのか、人間だから救出して運び出すという。それは警察や自衛隊がちゃんと班があって、トップがいて、班長がいてやっていますから。
　それは、こうやって完了していたのです。だけど、そういうところに残っていたわけです。一般の住民は 14 日にはほとんど完了していた。
○質問者　14 日のちょうど朝方というのは、一番本部長が大変なころ。注水の関係で、給水の指示をされていて。
○池田元副大臣　大変だったよ。
○質問者　ちょうどそのころにも双葉病院の自衛隊による救出をやっていたらしいのですね。それはもう給水等の関係でお忙しかったので、そういう報告は受けた覚えはないですか。
○池田元副大臣　受けていない。受けたという記憶がない。
○質問者　それと、池田先生が本部長として現地におられて、御記憶としては 12 旅団が救出に当たっていたということですか。
○池田元副大臣　後で聞きましたら、結局、中央即応集団というのは確かにそうなのだけれども、事故対応なのですね。12 旅団は住民対応。
○質問者　なるほどね。
○池田元副大臣　中央即応集団は例の CB 何とか、核とかなんとかに対応する部隊でしょう。それは事故対応ということで、オフサイトセンターに次の指令が来たわけです。外回りは 12 旅団で、住民をピックアップするとかいろいろ把握していたわけです。警察よりそちらの方がよく情報が入った、把握していたと。
○質問者　中央即応集団の方々は、プラントのまさに給水の関係とかをしていた。
○池田元副大臣　そう、それで備えていたわけ。あとはみんな J ヴィレッジに行ったわけです。
○質問者　先ほど、池田先生のお話で、3 月 15 日に移転する前に病院からの搬送を確認したと。そのときに、8 時 35 分ごろに副指令、今浦さんですか。副指令の部下と住民、安全・保安院と警察官が現地へ行って。
○池田元副大臣　ジープに乗って、現地に出発したのが 8 時 30 分。多分、近いから、それでバスとか救急車と合流したわけです。それで確認して、どこへ連れて行くということになって、それでそこから全員、車に乗せたという報告がジープから来たわけです。

私は今浦さんから受けたと思ったら、本人に聞いたら違って。だから、だれか私の幕僚というかスタッフから聞いたと思います。

○質問者　そのときの話では、全員救助しましたよと報告があったと。

○池田元副大臣　よかったと思った。それが気がかりだったから。

○質問者　実際、まだ調査中なのですけれども、朝の段階ではその後、3回に分けてやっている可能性があった。

○池田元副大臣　3回に分かれている。

○質問者　1回目は終わっている時間帯かもしれませんが、2回目、3回目。14日夜から15日未明にかけてまで続いている感じで。これはちょっとまだ調査中なのですけれども。

○池田元副大臣　だから、私は96人と受けた。

○質問者　お聞きになっているのですね。わかりました。

○池田元副大臣　朝10時半ごろ。

それと、もう一つ問題があるのではないのか。それについていえば、報道によれば。やむを得なかったのかもしれないけれども、北に行ったり南に行ったりしたのでしょう。それで亡くなる方が出てしまったわけでしょう。どうしてそうなったのか。非常に重症の方もいる。だけど、これについては私は責めを果たしたと思ったわけ。やはりそういうもの全く関係なく移転などできないのだから。

それから、医者がどこかに行ってしまったというのも誤報らしいな。

○質問者　大体95運んだことは間違いないのか。

○池田元副大臣　これには80になっているのだよ。

○質問者　さらに残ってしまっていたという話か。

○質問者　さらに残って、16日までどうも続いたらしいです。

○池田元副大臣　その件については弁護士がいますよ。私は連絡だけあって接触していないけれども、調べています。ああいう報道はちょっと遺憾でしょう。

○質問者　わかりました。

○質問者　もし、池田先生、御記憶があればですが、14日、自衛隊員が給水の関係で活動されますよね。11時1分の3号機の爆発で軽傷を負われたということがあったのですが、もしこういう話を聞いたことがあればということなのですが、その後、自衛隊に対して一旦退避命令とか撤収命令が14日に出たという話をお聞きしたこととかありますか。

○池田元副大臣　それは是非、事故調で調べてほしいのです。これは結局、[redacted]憶病になってしまった。16、17、18の消火のときも、上からやるときもそうだったけれども、[redacted]臆病になってしまったと言われていますが、そういう感じがします。

○質問者　それはやはり感じとしてはありましたか。

○池田元副大臣　うん。

北澤さんと私は親しいけれども、防衛庁長官が幕僚長にお願いしたということはないでしょう。記者会見でお願いしたと。注水や消火というか、散水のために出動をお願いした

と言っている。だから、想像すれば、自衛隊はかなり固くなっていたと思う。

それから、もう一つ言うと、[redacted]臆病になっていたと思うのですが、3 月末から 4 月に入って行方不明者の捜索を[redacted]被災地でやったわけです。自衛隊はそれこそ半端ではない、数を調べればわかる。2,000 人とか 3,000 人とか 4,000 人投入する。警察はせいぜい 500 人とか 600 人、数が違う。

自衛隊は核心に入らない。20km 圏内まで入るのは警察。20km 圏内には決して入らない。警察から情報をとって、警察の後を追って 20km 圏外でずっと捜索を続けていた。

それで私は、書いてあるけれども、これは北澤さんではなくて海江田から言わせたのかな、20km 圏内でやってくれと。警察もやっているし。それでようやく 5 月 1 日から 20km 圏内に入ったのです。

それまで多く動員して、警察の後追いをして周りでぐるぐるやっていた。警察はものすごくやったと思う。警察は 20km 圏内に入って、警察署長がヘリで降りたでしょう。同行記者を集めてやったでしょう。私、素晴らしいと言って電話して激励したもの。

ある県首脳に言わせると、放射能については知っている人ほど臆病になると。そういうことを言っています。

○質問者　そういう感覚はやはり現地本部でもありましたか。

○池田元副大臣　でも、最初の 14 日の朝の出来事が彼らにとってはいけなかったらしい。[redacted]

自衛隊もよくやったのですが、ただ、[redacted]そういうふうに。それはある自衛隊関係者も否定しなかった。

○質問者　3 月 14 日のお昼、水素爆発以降、池田先生がごらんになられて、自衛隊の一部、人数が少なくなったとか、移動していったというような具体的な御記憶とかございますか。

○池田元副大臣　私自身は直接はありませんけれども、報道とかによればそれらしき話があったみたいだな。それから、自衛隊が来てもう撤収するのだと住民に言ったという噂もあるし。結びつけるとそういうことになると。

○質問者　直接先生がお聞きになったりしたことは、当時現場ではなかった。

○池田元副大臣　直接はない。だから、それは皆さん、調べてくださいよ。それは客観的なあれだから。

先ほど、医療班の代替してくれた放医研とか、みんなよくやってくれたと思うのだけれども、最後、あわててみんなと一緒に移動しないで先に県庁に行ったりしたというのもそうだよね、浮き足立ってというか。専門家なのにね。専門家ほどそうだ。

○質問者　オフサイトセンターに詰めていた自衛官もいたと思いますが、住民安全班とか。その人たちは最後の池田先生から言われるまで。

○池田元副大臣　それがわからない。

ちょっと聞き書きしましたら、結局、先ほどのリエゾンオフィサーではないけれども、3人ばかり連絡係でジープで行きましたね。副指令は待っていた。3人帰ってきたわけ。

それから、114号で県庁に行こうとしたけれども混雑していて、郡山の方から県庁まで来たのです。だから、そういう意味でオフサイトセンターというか、現地対策本部詰めの副指令は一旦は県庁へ来たと。

[redacted]

東京消防庁などは聴き取りはしないのですか。

○質問者　これからです。

○池田元副大臣　これから。

双葉病院において救助に難を期した理由というのは、寝たきりだから大変だったと聞いています。

○質問者　まだ残っている時点で、何かOFCの本部の中が驚いたり大変だとかいう雰囲気はなかったですか。

○池田元副大臣　OFCの中は、私が何度も言うものだから、住民を見つけたら、とにかく外に出てもらわないといけないし、それをやってから最後に私たちが出るのだという意識を植えつけたから、そういう空気でしたよ。

ただ、後であのときにいたとかいうのもあるけれども、かなり任意で残っていた人たちが。あのときは報道がすごくあって、自衛隊なんかが行っても拒否したおばあちゃんがいて。そういうあれでした。

あと、その後の話をちょっとしましょうか。

最後の項、この前、渡してあるやつですね。いっぱい資料はあるのだけれども、任務遂行の状況から、オフサイトセンターの最近の活動状況というのがあって、仕事はしたつもりなのですが。

私は3月15日に帰京して、その後行ったのが、3月29日ごろだと思うのです。

住民の一時立ち入りがございまして、すごく住民の希望が多くて、私が経産省の服をつけていると何言われるかわからないというものだから、お忍びで行って住民に率直に意見を聞いた。会津若松の体育館に行って。

そうしたら、何人かの人が、やはり一時帰宅、とにかく家に物をとりに行きたいと。それともう一つ、[redacted]女性などで避難所で貧富の差があると言う。何ですかと言うと、お金を持ってきた人と持ってこない人と全然違う。お金は持っていないといけない。だから、お金が欲しいと。必要なお金ね。当座のお金は必要だと。

この2つは優先的に何より早くやらなければいけないと思いまして、まず、住民の一時立ち入りは、先ほどの話に関わるのだけれども、これは大変なオペレーションなのです。我々がやるバス旅行とは違う。

全部、住民を避難所から連れてきて、ある1か所に集めて、防護服を着せて、中に入れ

て、バスか何かに乗せていって。バス停みたいな、駐車箇所を決めて、そこで自宅に行って物をとって帰ってきて、戻ってきて、それで圏外に出て除染をしてという。

その間に、住民によっては、家にとどまりたいという人がいるかもしれないし、イヌ・ネコがいたらどうするとか、大変なオペレーションなの。

それで私が行った直後の会議で、毎日朝晩会議をやっていますから。どうやったらいいか担当者でブレインストーミングをやれと。これはなかなか難しいオペレーションだった。

それで毎日、ブレストをやって、4月4日にはその実施計画をまとめたのです。こんな文書になるような、いろいろあるから。それで本部に上げた。そうしたら、本部がなかなか決めてこない。

初めは、現場の自衛隊のバスがあって、自衛隊のバスを使うということになっていた。でも、どんどん後退してしまって、民間の借り上げということになった。しかも、なかなか決めないから、4月 15 日に早く決めろと文書を出したのです。原災本部長や官邸の警察庁から来ている伊藤に。それでようやく動いて、それでわずか 10 日間ぐらいで決めて、各首長と会談して。

首長にもめちゃくちゃなことを言う人がいまして、当然、河内村とか小規模なところからやるでしょう。しかも、私の発案で難しいからトライアルをやったのです。ある町長は双葉郡全部一緒にやれと言うのです。それはできないといって、そんな調整までやらなければいけない、全部やった。

それで結局、連休中の3日にトライアルをやった。これは大きくニュースになりましたよね。[redacted]浪江町長を説得とかやったりして、5月6日から開始して。私は5月 20 日ぐらいに任務を離れたけれども、すごく現地本部は一生懸命やって本当に激賞したのだけれども、ほとんど事故なく一巡したわけです。今、2巡目とかに入っている。こういうことがありました。

もう一つの仮払金の支払いというものが、結局、住民の要望が強かったものですから。初め、別のもう一人の副大臣は、市町村長を集めて銭を配るということを言ったらどうかというから、それはだめではないかと。東電に対しては住民は怒っているわけですから。謝りもしないで金だけくれるのかというのが必ず出ると。

それで私が海江田大臣に4月7日に、東電のまず謝罪が先ではないかと。何か御殿女中みたいな会社だから、県知事にアポをとってもとれないから来ないと言っているから、ばかを言うなと言って。とにかく、これだけのことだから県知事のところに行って名刺を置いて来いと。とにかく来なさいと言って。

それですぐ、4月 11 日に清水に来てもらったわけです。それでテレビの前で県民に謝罪した。これはテレビニュースで見た方もいらっしゃると思いますけれども。

それで1つセレモニーが済んで、あと副社長が関係町村、初め7つかな、謝罪訪問したわけです。初めは、清水が、立地町村だけとその日に行くと言うから、それはおかしいのではないかと言ったのですがね。

それで、謝罪訪問して、ついては仮払金を支払いたいのでお願いしますということになると、結局は市町村の窓口で住民とのあれになりますから。住民の要望とか、文書を受け付けてやるわけですから。そうなると東電は毎日のように僕のところへ、この町はこのようになりましたと表をつくって持ってきまして、結局ものすごくスピーディーに、連休前に支払い開始ということになったのです。これは要望に応えたつもりなのです。現地対策本部の仕事なので。

あと、警戒区域、計画的避難区域の設定というのは、私は住民の方からいったら若干問題があると思っていたのです。まず、市町村長への指示の発出者は、先ほどの話と逆だけれども、これは重大なことだから、現地本部長から中央本部長に上げれるようにしてくれと言ったら、そうなりました。

警戒区域は、要するに役人の世界は、取り締まりとか何とか管理主義的な発想が多いのです。そうではなくて、生身の住民がいて、そこで家財などがあって心配しているわけですから、それの兼ね合いがあるわけです。地元の人は、私の考えについては理解してくれている。

それからあと、公益立ち入りというのがありまして、これは警戒区域を設定した後、中に工場の備品、金型をとりに行きたいとか、いろいろあるわけです。それの基準を決めて、これはめくら判ではないけれども、できるだけ応じることにして、どんどん入ってもらった。

それから、あと3km 圏の立ち入りについても、かなり詳細なマニュアルではないけれども考え方をまとめたと。これはその後、実現できたのかな。

あとは野馬追用の馬の圏外への移動については、私が早く認めてあげた。これは高村君という、1 年生議員が現場に初めについて、ものすごく彼は貢献したと思うのです。牛や豚や馬のことも。彼が私について行っていますので、こういった点でも現地本部長としては個別案件だけれども積極的にやったということです。

あと、防犯体制は、私は初めから空き巣が 20km 圏内で横行するのではないかと思ったら、そのとおりになってしまって非常に遺憾だったのだけれども、中野寛成国家公安委員長に増員を要請したりしたのです。

それから 20km 圏内における行方不明者の捜索は先ほど言ったとおり、ようやく重い腰を上げたと。

あと、いろいろ現地本部に人が来るので対応をしたし、広報的なことも地元の民[redacted]民友でインタビューをうけたということもやったのです。これは事故の直接な対応ではありませんが、これも現地本部の大事な仕事なので、是非、これも総括するときにはテーマとして挙げていただければと思います。

○質問者　3つ目の○の警戒区域、計画的避難区域の設定、この発出を現地本部長から中央の本部長の方にしたということですが、ちょっと先ほど頭の中が混乱したのは、むしろ現地本部長の方がよく御存じなので、現地本部長がやった方がいいかという話かなと思っ

たのですけれども、これは逆でもない。

○池田元副大臣　逆。これはかなり強権的なこと。私は正直言って、余り積極的ではなかった。いずれやらざるを得ないのだけれども、時期とか住民との対話とか、こういうものは総合的に考えないと。ただ、管理主義的な発想があったと思う。

だから、非常に不平等になったし、しかも、そんな取締りはあれなのに、空き巣だってこれをやったからどうということはないのです。空き巣は想像どおりに多かったわけですから。

こういうところは、やはり全体を見て、イニシアティブというか、現地の本部長の仕事だと思います。上から目線ではなくて。上からバサッと警戒区域とバリアをつけてというのは、簡単かもしれないけれども、現実問題、大変ですよ。

家財道具とかだけではなくて、いろいろな意味で。自宅の近くに牛がいるとか、いろいろなあれがあるではないですか。しばらくの過渡的な措置とか、いろいろあっていいわけではないですか。

○質問者　もうちょっと後の話になるのですが、先生が5月19日～[redacted]日に入院されて、その間の本部長の代わりにどなたかというのはなかったのですか。

○池田元副大臣　当然ありますよ。私のレポートにも書いてありますけれども。

○質問者　その間、ずっと不在になってしまうのは問題という。

○池田元副大臣　再三に渡り後任を決めるように、具体的に名前も挙げて言ったけれども、そのままにしていたわけです。だから、身内の恥をさらすようだけれども、これは事実だからしようがない。我々は国民に対する責任を負っているわけですから、責任ある立場なのだから、当然、現地本部長が離れたら即決めなくてはいけないことでしょう、事柄上から言ったって。政務官もいるのだし、それを決めなかったのは非常に私は遺憾だと思う。政権の一員として申し訳ない。

○質問者　これは何が原因なんでしょうか。

○池田元副大臣　それを機会に交代させようとか動きがあったかもしれないけれども、わからない。ただ、非常に余り人間的でないというか、そういうあれで余りよろしくない。これは事故調になじまない、政治の世界のお話かもしれませんけれども、ただ、筋目から言って、正直申し上げて、これは全くおかしなことなのです。

これは先ほど言ったように、だれしもわかるとおり、当然、責任がある立場だから、後任は決めておかないといけないというのはだれしもそう思うと思うので、それが発覚したときに直ちに菅総理から電話がかかってきて、後任は、田嶋政務官は決めました、池田さんはそのままと言ってきた。そうなるのです。

ところが、非常に遺憾なことに私が不在だったというのがそればかり、1行だけで報道されて、私が職場放棄をしたような印象を与えかねないというか。私はこういう人間だから、ものすごくはっきりしていて、別にポストなど全然、どうってことないのだけれども、後任者を決めないのが、ちょっとよくなかった。

○質問者　済みません、ちょっと１点忘れていました。

３月 15 日に松下副大臣に引き継がれたときに、引き継ぎを直接されているようなのですが、そのときの重要なポイントといいますか、強調されたことは何かございますか。ここはひとつよろしくなというような。

○池田元副大臣　今、言った仕事の内容を報告して、まだ事故対応は続いていますから、そこは、その当時言っていたとおり、しっかりと事実関係を把握しないといけないねという話はした。客観的に、じっと考えて。何かある種、措置をとる場合だったら、十分な条件というか、データとか何とか。これは秘書官なども、私がよくそう言ったと言っていますけれども、そう言った。

それから、初めの５日間は事故対応が中心でしたけれども、これからは被災者の方々が大きなウェートになってくると。松下さんはそちらの方を随分やったのです。だからちょうど交代時期がよかったのではないかな。

松下さんは本人が言っているとおり、市町村長を回ったり。結果的に被災者支援チームの事務局長にまでなった。あれはごく自然な、当然最初の修羅場を担当したから交代させるということだと思うので。

○質問者　東京に戻られまして、これはすごく、担当された中ではそれほど大きな話ではないのかもしれませんが、３月 17 日になりまして、作業員の線量限度を 500mSv に上げたいのだという話が持ち上がっていて。

○質問者　17 日に小佐古参与と空本議員が副大臣室に来られて、そういった話をされに来たのかと思うのですけれども、覚えていらっしゃいますか。

○池田元副大臣　何、いつ。

○質問者　３月 17 日の夕方ぐらいです。

○池田元副大臣　夕方、だれが来たと。

○質問者　小佐古参与と空本議員、その少し後に長島議員が。

○池田元副大臣　空本と、何ですか。

○質問者　空本と長島議員と小佐古参与。

○池田元副大臣　どんな字ですか。

○質問者　小さい、佐藤の佐に古いと。

○池田元副大臣　それはオフサイトセンターというか、福島に来てから２人会ったね。それは後の話だけれども、副大臣室に来たことはありません。

○質問者　そうですか。

○池田元副大臣　空本先生のあれは、後で４月かな、私のところに表敬ではないけれども来た。

○質問者　３月のときは会われていない。

○池田元副大臣　会ってないと思う。

○質問者　先生、時間はいいですか。

○池田元副大臣　いいですよ。これは重要だから。乗りかかった船だから。

これは、戻ってきてからの副大臣の日程表、これ6項目あるでしょう。ちゃんと取ってありますからね。18時、長島昭久議員。

○質問者　これは17日ですか。

○池田元副大臣　17日。例の防護服がどうだとか、製造局の商務流通審議官や保安院に事前に説明させて、放射線限度量の。その後は石油連盟要請だよ、これ。

○質問者　長島議員の来られた後になるんですか。

○池田元副大臣　そう。空本君は副大臣室に来ていません。

○質問者　長島議員から、どういう話があったのか。

○池田元副大臣　それは500mSvにするということ。それで記憶をたどりましたよ。

記憶をたどって、ここにデータも、これはこのためにしつらえたのではないけれども、要するに長島が総理の指示によって、細野補佐官を補佐し、放射線の許容量について担当することになったという話で連絡があったわけです。ついては池田副大臣に上記許容量について考えを聞きたいと。

私は今のデータにあるとおりに、その前に保安院の意見も聞きました。だから、これは何という話ではない、立ち消えになった話ですけれども、これは従来の炉規法では、緊急災害従事者への許容放射線量を100mSv／hとしていたのを、14日づけで250mSvとしたのですが、今回の事故の緊急性を見てこれを引き上げる、国際基準、ICRPの500mSvまで緩和すると。これはどうかと聞いてきたわけです。

だけど、勿論、慎重にやらなければいけないけれども、このときはそんなに定かにあれではしませんでしたけれども、やるならやるで、ちゃんと限定してやるべきだという空気になったと思うのです。

だけど、これは沙汰やみになった。それだけの話です。

○質問者　これはその後、事務サイドの人間や大臣とかに何か話されていますか。

○池田元副大臣　それは秘書官に聞かないとわからない。でも、私には必ずすべて報告しているからあれだけど、これで終わりになっているのではないかな。続編はなかった。

○質問者　この日のうちに話がなくなってしまったのですが、官邸からの指示がないのですが、準備はしなさいよという話は事務方には降りてきていたようでして。

○池田元副大臣　[redacted]

それから、もっとマクロで言ったら、何とか本部が乱立したでしょう。それでその何とか本部が乱立してので、それを整理するチャートができたくらいだから。その後、整理したけれども、場当たり対応が多くて。[redacted]

だから、それはみんなでやったからうまくいったのではないかな。ちゃんと組織としてのコミュニケーションというか、稟議ではないけれども、いろいろ意見を聞いて最後、決

定して下ろすというようなのが本来だけど、その中でいろいろがんがんやったり、泣いてしまったりというような状況[redacted]ね。

それにしては、大きなあれはなかったのではないですか。この期間は、非常にリスキーなあれだったよね。

だから、本部が乱立したというのはわかりやすい問題点だから、マクロではそれは問題ですよね。

もう1点、先ほどちらっと言いましたけれども、この事故の反省というか、レビューは大事だと思っていますが、視点をよく考えていただきたい。これを論評するなり、客観的に批判、分析して、あるべき成果を出すというか、それを置いて、分析非難というか、そのときのあれとして、今までは何かごっちゃになっていると。

例えば、マニュアルに基づいてオフサイトセンターは機能不全、機能しなかったと何度も書いてある。マニュアルだと、各自治体が全員参集して合同対策協議会をつくることになっている。当時、そう考えたから、果たして今度のシビアが、シビアの深刻の度合いと横の広がりが全然違う。深刻度が違って、複合災害で。

例として今、1つだけあげましたけれども、そういうときと平和な時代につくったマニュアルというのはどうなのかと。そのマニュアルから出発して、今度は違ったというのは全くおかしいのではないかと。当事者としていろいろやってきた私からすれば、おかしいのではと。

もっと大きく、将来の日本を考えて、やはりこういうときはこうあるべきで、それからいったらこれは違うのではないかと。だから、単なる批判ではなくて、こうあるべきだというのはあるけれども、クライテリアというか、判断基準が皆さん、ないとなかなか立派なことは書けないのではないかという感じが。余計なことを言えばね。

文書を書くのは簡単だ。今までのあれから言ったら、食い違いがあったり、今までのマニュアルと違うところがある。そうではないのでしょう。

私はそう思うのですが、どうですか。

○質問者　いや、全く。

○池田元副大臣　それは私は前向きに期待しているものです。

○質問者　昨日も夜、議論をしていたのですけれども、このマニュアルと県のマニュアルとかいろいろありますが、なぜここをちゃんと詰めていないのだろうなというのは結構ありましたね。

○池田元副大臣　だから、今回の事故対応で、そこから始まると思うのです。防災センターとか分析する場合は。まず今、考える知見の中ではこうであるべきだと考えて、それから言ったら違うのではないかという。ところが、今から考えるとお粗末なのだけれども、絵で書いたようなマニュアルはあるわけだ。そこから出発して論議をしても意味がない。

だから、当のオフサイトセンターをあの期間、担当した私からすれば、オフサイトセンターは、具体的な理由があれば機能してないといってもいいのですが、一概に全体として

機能しないとか何とかは違うのではないかと。そういうのはイエス＆ノーで部分的には両方あると思うのです。

だから、少なくとも３月 11 日の朝から人が集まり、何ら疑うことなく職務があって、職務を執行したことは事実なのです。だけど、世間で見ると、すべてオフサイトセンターがだめだったから官邸がやったとか、中間報告も大体、そんな調子だった。

何か所ある、オフサイトセンター。オフサイトセンターはものすごく言いやすい。官邸に言うのはちょっと勇気がいるから。官邸はせいぜい、上と下でちょっと違ったという話で。官邸の本質的な部分の１つは先ほど言ったような、為政者というかリーダーの資質の問題もあるし、コミュニケーションのとり方とかあると思う。それが結局、本部の乱立とか場当たり対応などに表れているわけですから。

そうすると国民はそういうあれで納得する。だから、なかなか難しい作業だと思います。期待していますよ。

○質問者　確かに、基本的に現場の与えられた状況の中で機能したと。現実には、通信機能はかなり麻痺して、電話１本しか使えないとか、道路は至るところ渋滞やら陥没やらで、いろいろ移動や集合がうまくいかないとか。

そういう中で、本来あるべきであった業務なり、その瞬間、瞬間やるべきであった業務で何か支障を来たしたということは具体的にありますか。

○池田元副大臣　私にとって、今、すごくよかったのですが。私としては何も飾らない。率直に言って、与えられた条件の中で仕事ができたと思うのです。与えられた条件、与件というか、あの状況の中で。オフサイトセンターの建物のあれから、通信状況の悪い中では。通信状況が悪い、いろいろな困難の中では。人繰りもなかなか大変なときで。最終的には後世の人が評価するのですが、私としては与えられた中で最大の努力をし、何とかできたのではないかと思います。

それともう一点、今、何を聞いたかな。もっと大きな、私がどうとかいうのではなくて。

○質問者　そういう状況の中であっても、何らか問題点としてこういうことがあったとか。

○池田元副大臣　先ほど申し上げたような。

あと是非、参考になると思うので、今度の原子力の複合、深刻な事故の対応策は現在、今までの前提すべてあれして、こうだというのがあって、それから言うとこの点がだめだという発想で御教授いただければ、国民というか我々にとってありがたい。

中間報告にも片鱗は出ていますよね。ざっと読んだ限りでは出ているけれども、ごっちゃになっているので。

先ほど、柳田さんは通信手段とか何とかおっしゃったけれども、社会というか、今の日本の特性から言ったら、現段階では例えばローカルで原子力事故は事故処理ができないでしょう。原子力事故というと大きな事故、東電なら東電、全社的だよ。プラントとか何とか個別ではなくて全社的。

それから、政府もやはり中央政府だよ。そうでしょう。できませんよ、地方政府や地方

のあれで。ローカルで処理できる話ではないでしょう。場合によっては、もっと国際的な支援を求めたりしたら、なおさらそうですよ。だから、東電の本社に本部ができたわけです。

今の時代で、例えば、現地対策本部で避難区域の設定から何から、全体的な視野というか総合的なあれから言っても、やるべきではない。いろいろな知見とか、何とか。今、ITの時代に。

局部の地震なら別だけど、原子力事故というのは全社的に対応する、いろいろな人の知見が必要だし、海外からも必要だし、リソースもいろいろなところにあってやるということで。

○質問者　国が入らないとどうしようもないですよね。

○池田元副大臣　国と会社全体のあれだよ。

○質問者　原子力災害対策の基本的な考えというのは、現地対策本部をつくって、できるだけ現地でどんどんやれという建前があるわけです。ところが現実に、現地本部から例えば海江田さんなり何なり、あるいは官邸にこう言っても決めてくれないとか、勝手に現地でもっとやってしまってもよかったのではないかとか、それぐらいの権限があったとか、そういうことはないですか。

○池田元副大臣　現地でやった方がいいというのは、後半戦ではありました。先ほどのいろいろな、公益立ち入りとかあって。

最初の方は、現地ということではなくて総合的に事故処理は判断しないといけないから、現地だけで判断できないです。だけど、自衛隊の配置換えとかは緊急事態でやりましたが。それから、給水というかハイパーレスキューを早く出してくれとかやりましたよね。

総合的にやるのは、やはり原発は国でやっているわけではないから。原子力事故というのはローカルではない、ナショナルなのです。あるいは前に言っていた、グローバルなのです。だから、将来の原子力事故対策というのは、多分、今までの枠組みとフレームは全く違っていくようになると思う。

○質問者　そういう場合、現地の例えばプラントの中だと、あるいは４つプラントの中の全体の、吉田さんがやったこととか、そういうところは混乱していたり、現場というのは意外と状況がわからなくて、東京にいた方がわかるとか、いろいろ災害というのは難しい問題があるわけです。

そういうときに本当にプロの技術者なり、技術的判断なり、例えばプラントについての状況を把握したり、こういうところを見落としているのではないかという助言をしたりというのは、むしろ離れている東電の本社なり保安院なり、そういうところで判断した方が、意外と落とし穴を見つける。

○池田元副大臣　そうですね。

○質問者　そういう点で、何か中央の技術的技量なり判断なりというのが機能していなかったのではないかという感じがあって。

○池田元副大臣　私が事故対応の緊急対策本部のテレビ会議は大体座って、ときには発言しますよ。その一つは、東電が大き過ぎて、いろいろなところに意見を求めなければいけないというのがある。ああいう東電本社の緊急対策本部はすごいですからね。後ろに何班があっていっぱいいて。

むしろ、単純な学者の意見、数人の意見を聞くとか、人に聞くとかいうのではなくて、班別で一応、シミュレーションをしたやつを一々映し出してやるわけです。それがいいときもあるけれども、そうでないときもある。全体がわかっていない人も多いわけですから。だから、ときどき吉田所長がいろいろクレームをつけたりやっているわけです。

ちょっとずれるけれども、東電という会社の特性が１つあると思うのです。今のから言うと結局、学者とか何とかの知見をうまく生かすシステムはないのではないかな。それから、絶対、孤独というか一般の会社にあるような孤独な判断というか、リーダー独自の判断というのはない会社ですよ。やらない。みんなで一緒に渡れば怖くないという会社ですよ。　それから余り、専門家と言っても知らない、皆さんが指摘したように、機器の取り扱いすらおぼつかないというのは、お寒い話で。東電という会社は、一般の会社でいうリーダーが決断する会社では全くないです。今回のもなかったでしょう。成り行きでそうなったというあれで。

○質問者　こういう原子力災害というのは、本当に何が起こっているかというのは、システムについて何でも知っている男が必要になってくると思うのです。

○池田元副大臣　ジェネラルとそういうこと。ジェネラルというか全体のあれではなくて、この原発事故全体の。だけど今、細分化してしまっているし。

○質問者　ある意味で言うと、東電だけではなくて保安院も、そういう判断をできる人が、院長か次長が知りませんが、いない。

○池田元副大臣　ただ、それ以前にペーパーにも、メモランダムに書いたけれども、緊張。冷戦の後、デタントぼけと言われたけれども、まさに緊張緩和というか弛緩しているわけ。特に保安院は緊張緩和ですよ、デタントぼけですよ。東電もそうかもしれない。

それから、よく言われるのは、そのために安全神話に依拠をして無為に過ごしてきたというのが現状でしょう。これはもう、まぎれもないあれですよ。勿論、原子力村は、東電から政府の関係者も、保安院を中心にそうですよね。だから。原子力災害対策は全く不完全なものだったわけですよね。

そういう中でたまたまやって、そういうことを感じました。

○質問者　政府内でこれだけ不完全な意思決定のプロセスなど、何か混乱してしまうようなことを防ぐために、危機管理のそういう政治的な組織。例えば、外敵に対しては、内閣の中で危機管理を結構やっていますよね。だけど、こういう国内の危機、大変な災害とかいうものに対する危機管理というものが形成されていなかったのではないかと思うのです。

○池田元副大臣　防衛以外はないでしょう。災害で一応、形はあるけれども、災害の対応策は、これを機会に全部見直すべきですね。一応、できていてありますがね。

○質問者　国民の命にかかわるという意味ではね。
○池田元副大臣　そう。防衛はありますよ、それは軍事的には当たり前の話で。だけど、こういう災害に対しては、これほど弱さを露呈したわけだから、もう一度、やり直さないと。そういう意味で重要なのですね。
○質問者　原子力というのは何十年にわたり、プラントを増やしてきて、いろいろな体制に持ってきて、小事故に対しては、その都度手当てをして、いわばバンドエイトするみたいにやってきたわけですが。
○池田元副大臣　そう、弥縫策ね。
○質問者　ええ。根源的にそういうものをやってこなかった。それが政権が代わっても、気づかずに引き継いでいたと。
○池田元副大臣　厳しく言われると、そのとおりだと思う。それで、ぱっと。
　ただ、これを政治家が気づくというのは大変なことだと思いますけれども、結果は何とも言えませんがね。
　ただ、渦中に飛び込んで、余りにも枠組みがひどいというのは、正直言って枠組みが不十分だと感じました。
○質問者　例えば戦争で負けて、戦前の日本の陸海軍のシステムなり官僚のシステムというのが憲法が変わって変わったのかと思ったら、基本的にはほとんど変わっていない。
　そういう意味では自民党は民主党に変わったからと言って、体質みたいなものは変わっていないというか。
○池田元副大臣　私に言わせれば、これはちょっと時間がかかりますけれどね。そうにわかに変わるわけではないので。だけど、求める人は求めますから。
　日本的に言って、確かにそうかもしれませんが、ただ非常に、昔、言われたことがそのまま東電に残っているというか。やはりこの20～30年が会社のシステムとか何とかでも、新しい時代に即応して変わったと思うのです。結構、責任体制というか、リーダーシップというか、会社も引っ張っていって、それで失敗したら辞めて、次のやつがやるという、組織にはダイナミズムがあるわけでしょう。露骨になって、ある種、新自由主義的な発想かもしれないけれども。
　だけど、東電という会社にはまさに昔の日本が残っていたわけです。その辺は十分詳しくないのだけれども、東電と付き合っていると、無責任の体系というか、だれも責任をとらない、突出しない。みんな、周りを見てから判断する。決断ということはない。それをつくづく感じた。
　東電に全部押し付けるわけではないが、東電というのは特異な会社だと思いました。
○質問者　清水社長は経営畑、武藤さんは技術畑、それで一番原子力を知っている。だから、武藤さんが決断しなくてはいけない。それを社長が是としなくてはいけないものが本当のリーダーシップではないかと思うのですが。
○池田元副大臣　個人的に批判するわけではないですけれども、武藤さんが最も遠い人で

す。何を言っているのかさっぱりわからないですよ。あれだけのトップで、私はコミュニケーションがとれない。

例えば、水素爆発のメカニズムなどあったら明快に言ってくれるけれども、普段の方針とか何とかも声は小さいし、それがリーダーというのだから。現地にいて、すごく感じました。

内堀というのは普通の、戦後育った優秀な自治官僚だよね。武藤さんは何を言っているのか、さっぱりわからない。責任とか何とかではなくて、そういう世界だったのです。そういうことの体質論までいってしまっている。

○質問者　やはり、現地対策本部にいて、そういうことをひしひしと感じられた。

○池田元副大臣　ひしひしと感じた。武藤さんも含めた東電の個々の人、親しくなった人たちもいるけれども、そういう人たちも批判的というか、要するに責任をとる体質ではない。決断して引っ張っていくということはない。みんなに交じって、そろりと船の方向は決まる。船を引っ張る人がいない。清水などを見てもわかるでしょう。

[redacted]。[redacted]、大変な会社が今回の事故を起こした。

○質問者　所長の吉田さんとは議論したことはないですか。

○池田元副大臣　そんな話さない、議論はできなかった。

だから、テレビ会議では連中が主役だから、私もこちらにいたから話をしますけれども、腹を割ってコミュニケーションをとるという感じではない。本当は話したかったのですけれども。

○質問者　どうですか。吉田さんのテレビ会議の中の発言を聞いていて、どのような印象を受けましたか。

○池田元副大臣　その中で異質だったのです。今、言った東電というのは、ある種、無責任の体系で、絶対飛び出さない。しかし、吉田さんは現場を負っている責任感からノーを言える人だった。本部はそう言っているがこうじゃないかと。珍しいのです。

彼は所長をやっているから、心を決めたのです。そのためにやるつもりで。彼は全部、擁護するわけではないけれども、異質。意思決定の中で、はっきり意見を言うのは。

○質問者　今日、お尋ねする項目からちょっと外れるのですが、吉田さんの話が出たので。

吉田さんが海水を入れるかどうかというときに、官邸筋の話として、社長から直接吉田さんに、会社は使ったらだめだと止めたという話が出て、循環させたわけですけれども、吉田さんはそれを受けて、現地のプラントの免震棟の本部で、そういう連絡があったときに大きな声で、政府の命令で海水は止めろと言って、だけど、小声で部長には止めるなと言ったと。

○池田元副大臣　その話は本当ですか。

○質問者　それはどういう形でその情報をお聞きになったのか。

○池田元副大臣　私はあまり関与していないですが。だけど、まことしやかに昔の弁慶で

はないが、歌舞伎的ですね。本当にそうなのかな。芝居を打ったのか、わからない。わからないことはわからないというか。だけど、吉田さんはそんな芝居を打つのかな。もっと真っすぐな人だと思うけれども、そういう芝居を打ってだますとかよりも。わかりません。

○質問者　実際には海水は止めていない。

○池田元副大臣　止めていないです。政府の方はもたもたしたわけです。指示がわからない。[redacted]

ついつい、私もそのときは力を入れてやりましたので、久々に話ができてよかった。

○質問者　ありがとうございました。

○質問者　いろいろ、機微にわたるものまでありがとうございました。また長時間、いただきまして。

○池田元副大臣　いえ。是非マクロで視点をしっかり、我々に御教授をいただければありがたい。私も協力したかいがあろうということでありますので。

○質問者　我々も、法律、マニュアルが正しいという前提では全くありませんので。

○池田元副大臣　ないですよ。やたら、そういうあれがたまたま出ていたものですから。

後でまた何かありましたら、協力しますので。

○質問者　ありがとうございます。

○池田元副大臣　また何か言ってください。